

## 『腰畑村従来記』を読む



### 『腰畑村従来記』にみる

#### 越畑の草創期

時は昔、延暦八年(七八九)に諸国で洪水が発生し、飢餓に見舞われました。この時期に、摂津国田太庄(ただのしょう)多田荘(たのた)現在の兵庫県川西市全域・宝塚市北部・三田市東部・猪名川町全域)に住んでいた大田平角と西尾為井の二人がいました。平角には雲平、一見、細江という三人の子がおおり、為井には竜徳という子がおりましたが、この洪水の時に離れ離れになってしまい、平角も為井も心配でした。

平角と為井は愛宕山に避難し、愛宕山白雲寺の開祖である慶俊(聖)という高僧に仕え、二十余年という歳月が経ちました。

そんな中、雲平とその兄弟、竜徳の四人は都に流れ着いており、征夷大將軍として蝦夷を討伐したことで知られる坂上田村麻呂に仕えるようになりまし。この時期、清水寺が造営中であり、この四人は寺の造営に尽力しました。田村麻呂は彼らの功績を認め、衣服や家具を褒美として与え、その上、自身の名から「田村」の二字を与えました。

しかし、雲平らはこれをそのまま名乗ることは恐れ多いことだと行って、一字ずつ名乗ることになりました。雲平らは「田中」姓を、竜徳は「村瀬」姓を名乗ることにして、その後も田村麻呂によく仕えました。

大同二年(八〇七)、清水寺が完成し、弘仁二年(八一一)には田村麻呂もこの世を去りました。雲平ら四人はまたも流浪の身となり、愛宕山へお参りに行ったとき、凶らずも実父である平角・為井に再開することができ、歓喜しました。そして、親子六人で慶俊に仕えることになりました。

弘仁四年(八三三)のことです。雲平と竜徳の二人は慶俊のお使いで、たびたび丹波の国に行くことになりましたが、この辺りは山の中で人家からも離れており、夜も暗く、不便で危険なところでした。

そこで親子で話し合った結果、「この辺に家を作って親子ともども一時的に住もうではないか、そしてこの辺りを往來する人々の接待をしよう。後に定住して、田畑を開墾しよう」という結論になりました。

慶俊にこのことを話すと、「よいではないか」ということになり、その上、家まで建ててもらった(家を建てる費用を出してもらった)ということか。

弘仁五年(八一四)に、この地に移住し、平角と為井は隠居生活に入り、雲平らはますます慶俊によく仕えるようになりました。その合間を縫って田畑を開墾するようになりまし。雲平・竜徳の息子らも成人し、分家し両親の名前を忘れぬようにと、「大西」「平井」を名乗るようになりました。

この頃より、この地を愛宕山の腰、中腹に位置することから、「腰畑」というようになりました。貞観二年(八六〇)には、田村麻

呂の女后（女御の妻）薩埵御前（さつたごぜん）が家臣田村道弘を従えて、この地を来訪しました。御前はこの地が生還地であることを好まれ、雲平、龍徳らは田村麻呂に恩を受けた身であるから、子どもたちも御前に従うべきと考えました。

そして、「御前が都を住みにくいと思われるようでしたら、この地に移住されてはいかがですか」と勧めたところ、御前はその勧めに応じ、貞観四年（八六二）に家族・家臣を連れて移住してきました。御前は自分の財産を分け与え、田畑を開墾させました。御前自身は剃髪し、庵を結んで田村麻呂の冥福を祈り、貞観十一年（八六九）に亡くなりました。

その後、一五〇年ほどが経ち、集会の場で田村準玄（道弘の子孫か）が次のようなことを言いました。

「百五十余年前、弘仁年中、この地が初めて開かれたとき、雲平、竜徳らは慶俊聖のありがたいお言葉を受け、聖は田畑を開墾するにあたって彼らは財米をいただいた。貞観年中には薩埵御前がこの地に移住され、御前からも財米をいただいた。この大恩によってこの辺りではとても繁盛したではないか。この大恩を忘れたら天罰を受けることは避けられないぞ。だから、聖と御前をこの地の氏神として祀ろうではないか」ということで、天禄元年（九七〇）に聖宮・御前宮が造営されました。今の八坂神社の前身にあたります。

承平三年（九三三）、菅原氏の家臣であった谷口官太、横谷佐源、木村運啓、斎藤野猛、伊和護、脇仲条才、松井兵庫、鍋浦賀門ら八人が移住してきて、田畑を開墾しました。

長和三年（一〇一四）には、陰陽師で知られる安倍清明の家臣であった妙法寺清経、石谷安喜元、水上此三士、斎藤外記（斎藤野猛の子孫）が何かしらの訳があつて、この地に移住してきました。

文永八年（一二七二）には、鎌倉幕府四代将軍藤原（九条）頼経の家臣で、東山に住んでいた福田護光という武士がこの地に移住し、新田を開墾しました。この護光は祇園の八坂神社を強く信仰していたがために、牛頭天王（ごずてんのうくササノオノミコト）を勧請して、弘安元年に祇園社を建てました。これが今の八坂神社です。

この社がとても美しく、毎年の祭礼の折には多くの人で賑わったといわれています。このころから、祇園社が氏神となりました。その後も各地から人々が移住し、嘉暦（鎌倉時代末期頃）には五八軒となりました。ところが、開墾するにも土地がなくなってきました。

権力者となっていた護光は元徳二年（一三三〇）六月十四日の参会場で、「この地の田畑を開墾したものは自分に至るまで、四十六人だ。これはこの村を開いた住人だ。

そのほかのものはヨソモノではある。共に田畑を開いたといってもこの村に功績がないではないか。だから、祇園社での参会ではこの四十六人だけで万事格別にしめしあわせる行事を行おうではないか」と提案し、決定がされました。

その後、室町時代、康正のころ（一四五五年から一四五七年）には八十九軒でしたが、応仁の乱の時期には、乱の影響を受けて、七十六軒の家が破滅してしまいました。戦国時代の永正十五年（一五二八）には大飢饉が起こり断絶する家も出てきました。永禄十年（一五六七）には七十軒となったこととです。



# 越畑と清水寺の関係

## 『清水寺縁起』と『腰畑村従来記』から読み解く

雲平とその兄弟、竜徳の四人は、清水寺の造営に功があったと記されていますが、ここで、清水寺の創建時についていくつか確認しておきたいと思えます。

清水寺が創建された年については、文献『清水寺縁起』がいくつもあり、内容は必ずしも同一ではありません。

有力なものをまとめると、宝亀九年(七七八)、大和国の興福寺の僧賢心は、夢のお告げで北へ向かい、山城国愛宕郡八坂郷の東山、音羽山に至った。金色の水流を見出した賢心がその源をたどっていくと、そこには千手観音を念じ続けている行叡(ぎょうえい)という修行者がいました。賢心に「私はあなたが来るのを長年待っていた。自分はこれから東国へ旅立つので、後を頼む」と言い残して、去って行きました。行叡は観音の化身であったと悟った賢心は、行叡が残っていた霊木に千手観音を刻み、行叡の旧庵に安置しました。

宝亀十一年(七八〇)、坂上田村麻呂は妊娠中の妻高子のために、鹿を捕えようとして音羽山に入り込んだ田村麻呂は、修行中の僧侶賢心に出会いました。田村麻呂は帰宅して、妻高子にこの件を聞かせると、高子は自分のために夫が殺生をしたことを悔い改め、その罪を免れるために

お堂を建てたいと考えました

そして、延暦十七年(七九八)七月二日に清水寺が建立されました。観音像とそれを祀る宝殿が建立されたということです。この宝殿は田村麻呂の旧居であった檜皮葺の寢室を移築したものとされており。

その後、伽藍の造営が進み、大同二年(八〇七)八月には、高子が自身の寢殿を解体して移築し、これを仏殿としました。

ここで『腰畑村従来記』に戻ります。『腰畑村従来記』においては「大同二庚寅年清水寺造営円成」大同二年(八〇七)に完成したと記されています。すなわち、高子の寢殿を仏殿とする工事が完了したということを以て、清水寺の建立と捉えているのです。

高子とは『腰畑村従来記』における「薩埵御前」なのでしょうか。高子とは三善清継の娘であるが、詳細は不明となっています。

田村麻呂には高子以外にも妻がいたと考えられています。十一男・一女がいたことにはなっていますが、その母については全て知られていません。

「薩埵御前」とは本名ではなく呼称を意味するものと思われます。「薩埵」(satva)「サットヴァ」(sattva)、衆生、また「菩薩」(bodhisattva)「ボーディ・サットヴァ」の略語を意味します。仏教に対して信仰心が強かったがために、このような呼称が付けられたのではないかと思われます。

仮に高子を「薩埵御前」と考えてみたとした場合、『清水寺縁起』によると、高子は宝亀十一年(七八〇)で妊娠中であること、田村麻呂がその時点で十二歳前後であることから、その時点で高子が早くとも当時の結婚適年齢である十代中頃(仮に十五歳)だったと推定したとします。『腰畑村従来記』では「薩埵御前」は貞観十一年(八六九)に死亡しているのが一〇四歳になります。当時の平均寿命からしても高齢過ぎますし、九七歳の高齢で越畑まで来ることは難しいので、少し無理があるようです。このことから、「薩埵御前」はおそらく田村麻呂の側室の一人と考えることが妥当ではないかと思われれます。

### 編集後記

▽今回は『腰畑村従来記』をもとに、越畑の草創期を中心とした昔話を取り上げました。越畑と清水寺・愛宕神社には縁浅からぬ関係があるということでした。

▽『腰畑村従来記』が残っていたことにより、越畑の歴史が明らかになっています。各家には今も古文書が残っているかと思われれますが、先人たちの生きた証です。ぜひとも大切に保存していただければ、新たな魅力発見につながるかと思えます。

### 参考文献

- 『史料京都の歴史 第一四巻右京区』京都市編 平成六年
- 『日本歴史地名大系 二六巻京都府の地名』 昭和五六年
- 『愛宕山と愛宕詣り』八木透監修・鶴飼均 編著平成一六年
- 『坂上田村麻呂』高橋崇著 昭和六一年
- 『清水寺史第一巻通史(上)』清水寺史編纂委員会編著 平成七年